
ドラゴンから始まる物語

洋治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンから始まる物語

【Nコード】

N2113BA

【作者名】

洋治

【あらすじ】

自分の吐く息の大きさに緊張が増す

心臓の鼓動は激しさを増し、頭はくらくらする

足はがくがくし、手は震える

その目線の先にいるのは最強の生物、、、ドラゴン

1 (前書き)

処女作です。

それとは別に物語として好きになって貰えたら嬉しいです。

「助ける」心の中で強く叫ぶ
頭が冷える
体の震えが止まる

洞窟の最奥吹き抜けの広大な部屋に静かに眠るドラゴン
距離にして300メートル、ドラゴンに気づかせずに目的を果たす。

少年は足の裏に薄く魔力の膜を張る
気配を消し、風の流れのままに足を滑らせる

1ヶ月草のみを食べ、匂いは消している為ドラゴンの嗅覚に捉まら
ない

狙うは1点ドラゴンの尻尾の先、神経の通っていない部分を切り裂く
痛みもなく気づいたら指先から血が出ていたそんな薄皮をめくるイ
メージを頭に描く

右手に持つは小刀、しかしその刃は目に映らない程薄い
ドラゴンの鱗を切るための、ただ一度切るためのみ特化した小刀

音もなく鱗を1枚切り取る、小刀に薄く血が付いているのを確認
ドラゴンは眠っている
足を止めずに走り抜け、突き当りの壁に沿って出口を目指す、、、
いけるっ！

「グオオオオオオン」圧倒的な咆哮が部屋を揺るがす

気付かれた？何故？何故、、、っ！

迂闊さに歯噛みする、ナイフに付いたの血の匂いに反応したのか！

パニックに陥りかけた頭を整理し、思考を巡らす

距離は200メートルは離れた、お互い直接攻撃は届かない、ならば次に来るのは、、

今手に入れた鱗を媒介に魔力の盾を作る、このシールドの強化に全ての魔力をつぎ込む

ドラゴンの口から吐き出されたそれはレーザーの如く真っ直ぐ少年に突き進む

灼熱の炎炎を吐き終えた後、目の前に矮小な存在は存在しなかった
「グルルウ」軽く喉を鳴らしドラゴンは再び眠りについた。

「死ぬかと思っただぜ」

そう俺は生きていた、炎を受け止めるのではなく受けた状態から流され

魔力の盾を軟化し受ける力の向きを変える事で、炎の軌道から外れ激突寸前で左の通路に

炎は壁を貫き直進する・・・おっかね（冷汗）

俺に残った負荷は全て回転に変化する、、俺は独楽か！

足に薄く張った魔力のお陰で地面を掘る事も無かったし音も出さずにすんだが

摩擦力が無い分、回転が半端なかった、、回転の真理を掴んだ気がする、、。

理論上可能な筈だがここまで上手くいくとは、俺って天才？

「っとまだ油断は出来ねえ」

緩んだ気を引き締める、周りに魔物の気配は無い、ドラゴンの影響だな

まずは枯渴した魔力を回復する必要がある

俺はナイフに付着した血を少し指で拭き取り舐める

「ぐっ！、、、、」

体中を痛みが駆け巡り、瞬間上げそうになる悲鳴を堪える、、、、

痛みが消えた時には俺の身体に人には不釣り合いな魔力が溢れていた

「これでドラゴンの血の効力が伝承の通りと判明出来たな、、」

ドラゴンの血は摂取した生物のもっとも不足した部分を強化する、、作り変えると言うべきか？自身に起きた事を鑑みそう予測する

つまり俺は魔力が殆ど無い人間だったのだ、のだ、のだあ、のだ！
(エコー)

魔法の使えない俺が何故ドラゴンの火炎ブレスを受けれたか？
魔法が使えない程魔力の少なかつた俺は魔力そのものを使う荒業に
挑み

魔力の硬化と軟化と固定が出来るようになった

魔力の<質>を変える事によりドラゴンの炎を受けても壊れない程
の盾が作れたという訳

ドラゴンの鱗を媒介にしたのも良かったのだろう、、つつか掌に
埋まっただけど、、

つつかこれ融合してね？、、取れねー！

ちなみに炎を受け止めてたら、俺は今この世にいなかったね！（冷
や汗）

右手に持ったナイフを布に包み袋に入れ首に下げる

足元に魔力で文様を描き力ある呪文を唱える

「レポート」

目の前の景色が切り替わり、見慣れた景色が広がる

「成功したな」

家に着いた事を確認した俺はすぐに飛び出しいつもの場所に

木々に囲まれた中に綺麗に円状の草原がある、そこに一人の少年が
いた

鮮やかな金色の長髪

「だけど男だ」

惹き付けて止まないエメラルドグリーンの瞳

「しかし男だ」

見る者の心を奪う容姿に白い肌

「何故か男だ」

見た目は完全に美少女である

「残念だが男だ」

股間にゾウさんが付いているのを見たからな（無念）

「何をぶつぶつ言ってるんだい？、変態？」

「変態言うな！、むしろ紳士だ」

「？・・・誰がだい？」

「俺だ俺！」

「すいません、少し声が違う気がするんですが、、」

「少し風邪気味で声が少しね、、って詐欺士か俺は！ケイジだよ！
もういいと手を振り、血の付いたナイフを差し出す

「舐めろ！」

「鬼畜」身構える美少年

「っ！」 かつちん来たが、確かに説明不足だった

「ルウ、お前の病気を治せるかもしれない血だ」

まっつったく見えないがルウは病気で一年後に必ず死ぬらしい

臓器の一つが欠落している為、魔法で補っているらしい

「ふふふっ冗談さ、今度は何を持ってきたの？」

言いながらルウはナイフを受け取り、疑う事無く血を舐める

「！っ」 苦痛に顔を歪めるルウ

「身体を作り変える薬だ（たぶん）自分でも試した、少し痛みはあるが死にはしない」

「これの、、っ何所、、がっ、少しだよ、、っ」 痛みを堪えるルウ

「どうだ気分は？」 落ち着いた様なので声をかける

「・・・良く解らないな、、少し後ろを向いてくれるかい？」

「解った」俺は後ろを向く、背後から何か確認している気配がする

「っ！」 大きく息を飲む音がし、「ケイジ！僕は今日はこれで帰る、
すまない！」

駆け足で走り去るルウ。

「、、、治ったのかな？」一人になった俺は眩き、空を見上げる

「明日聞けば良いか！」

しかしそれからルウは俺の前に姿を現す事は無かった。

俺はルウの情報を仕入れようとしたが入手出来ない
まだ10歳のガキで、捨て子の俺に情報を手に入れるのは不可能だ
った。

しかし俺には確信がある、血の効力は本物、必ず治った筈だ
なにか止むに止まれぬ事情があったのだろう

ルウは頭が良い上に強かった

無学な俺に読み書きを教え、剣術を叩き込んでくれた。

金持ちの家だったらしく、俺に森の外れに家を用意し沢山の本をく
れた。

野生動物と何ら変わらない俺を人間にしてくれたのはルウだ
いずれ見つけ出して恩を倍返ししてやる！

まずは金だ！

金を手に入れる為に手っ取り早いのはギルドに登録し冒険者になる
事だが

その前に神の祝福がないとギルド登録が出来ない

祝福を得る方法は2択、大金を積むか

チュラン学園に入学しくエストをこなし一年間修めるか

学園は入学金は無く試験に受かれば誰でも入れる

チュラン国がギルド登録に学園を介し

優秀な人材を見逃さない為の制度だ。

俺は大金つつうか金を持ってねーので（自給自足）

学園に入る事にした。

試験を受けに学園に来たが、でけーな！

試験会場は何処だ？興奮気味にキョロキョロ見渡す

「おいおい何か場違いな猿がいるぞ」馬鹿にした声が後ろからするな
「うきっ？（何だ？）」「猿語で返し振り向く。

取り巻きに囲まれた男が呆れた顔でこちらを見る

背はすらっと高く黒髪に黒目整った容姿をしている黒の燕尾服がよく似合う

「まさか本当に猿とはな・・・」

「うきつきー！（誰が猿だ）」

「貴様馬鹿にしているのか！クロード様この猿は私が始末します」
取り巻きの一人が飛び出し刀を振る。

俺はビビった振りをして座り込み刀を避ける（こいつ正気か？）

「止める！」クロードと呼ばれた男は一喝し、刀を振った男は畏まる

「このような猿でも我が国の収入源となるのだ、見逃してやれ。」

「はっ」

話の流れから察するに偉い貴族かな？関わらないようにしよう

「君は残念な男だな・・・試験会場を探しているなら左の建物だ」

「ありがとうございます。」俺は一礼し会場に向かった。

「ではケイジ君、水晶に触れて魔力を込めてくれ」

ふむ、これは魔力の測定だな、確か白く蒼く黄く碧く赤く虹

合格ラインは蒼だったな

魔力の足りない人間は祝福を得られない

試験官の指示に従い水晶に触れる

俺は魔力の強さを自在に操れる為

色が蒼になるよう調節する

「ではこの紙を持って訓練場へ行ってください」

紙を受け取りこの場を後にした。

「今から木刀による手合わせを行う、魔法も使っても良いぞ」
女教官相手の手合わせか

最低限生き延びる力があるかを見定める試験の筈だから、

女教官の攻撃にひたすら木刀で受ける事に集中する、、
が、コイツ本当に女か？

一撃が異様に重い、受け流したい所だが、

目を付けられるたくない

ひたすら受け止め、必要以上に距離を取る。

「それまで！・・・君は少し臆病すぎるな、

それは時として仲間を危険に追いやる事もある忘れるな」

肝に銘じておきます。

紙を受け取る、次は筆記テストか、

「始めっ」

筆記テストの内容は一般教養が主だ、

モラルの低い人間は教養が低い事が原因となる事が多く

盗賊の育成場にしない為、教養の低い人間は

冒険者になるのが難しいシステムになっている

俺もルウが居なかつたらこの場所に一生縁がなかつただろう。

うむっ、平均点は取れたな。

「皆さまお疲れ様です、そのままお待ち頂き、

番号を呼ばれた方から面接室へ行ってください」

コンコン

「入りたまえ」

「失礼します」部屋に入り手前の椅子に座る顔を上げた先に髭面のおっさんがいた。

「君はこの学園に何故入ろうと思ったのかね？」

「冒険者になるためです。」

「何のために？」

「お金の為であり、やりたい仕事だからです。」

マニュアル化された面接を危なげなくクリア完璧！、、、っ！、、、まさか、、、っ！

重大な事に気付いた、俺は顔に出さない様全力を尽くす。

このおっさん、、、ズラだ！、しかも魔力で固定している、まさか俺以外に魔力の固定化に成功している人がいようとは、、、しかもズラに！

なんとか平静を装えた俺は、試験を合格した。

世の中は広いな（汗）

俺の冒険者への第一歩はここからだ！

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な？」壁に貼り付けた依頼書の一
覧を見る

チユラン学園の中にはダンジョンがある、試練の洞窟と言う名の迷
宮である、

いかにも初心者向けの名前なのに、最下層は不明
10階以降魔物の強さは格段に上がる、らしい
依頼書の殆どは試練の洞窟に関する物だ

目立つ行動は取りたくないのでソロ活動に徹する
ランク1の依頼からゴブリン討伐5体の紙を剥がす

「これを受けたいんですが」受付のおばちゃんに依頼書を渡す。
お姉さんじゃない、おばちゃんだ。

大事な事なので2回言うおばちゃんだ、、ふう（涙）

「はい冒険者カード（仮）に書き込みました。」
依頼を受けると入学時発行された冒険者カード（仮）
に書き込みされる、達成後受付に報告すればOK

初めてのダンジョン探索は緊張するな（汗）

ドラゴン？あれは違うよ、登ったの！外壁を、魔力を壁に吸いつか
せて！

魔力草（魔力を回復）食いまくったし、2度とやらない、やりたく
ない！

しかし、生きる為ではなく、冒険の為の探索は心が躍るね！
この気持ち、まさしく愛！、、違つか？（違います）

ダンジョンは明かりもないのに何故か明るい、、、
不思議だなと思いつながら足を進める、、、いたねゴブリン20
体はいるね、

1階だよ？多くね？

っ！か女の子襲われてんだけど？俺20体もゴブリン倒せる程強く
ねーし（泣）

だけど、ほっとけない。

意識を切り替え周囲を観察する、、、こちらには気づいていない
女の子は、強いな5分は持つか

足を怪我しているな、逃がすのは無理か、
んっ？1体気配の違うゴブリンが岩陰にいる、リーダーか？
まずは少しでも敵の数を減らす。

ナイフを媒介に薄く長く魔力を引き延ばし硬化、固定する、
魔力を前身に巡らせ軟化、固定する
気配を殺し足音も無く獲物に向かう

*「くっこんな処で、、、」

油断した、まさか宝箱に警報装置が付いているとは、しかもトラ
バサミの罠まで！

罠は外せたが、ゴブリンに囲まれた

下卑た目で舐めまわすように私を見る、背筋が寒くなる

纏めて塵にしてやる！

「フレアボム！・・・」

「フレアボム！・・・」

「・・・？」発動しない？、っ！あのトラバサミは魔力を吸い取
る機能もあるのか！

ゴブリンが3体こん棒を振り被り襲ってくる左に受け流し1匹を切るうとすれば

また別の3体がこん棒を振り被り襲ってくる、人を狩るのに慣れて
いる、ここはゴブリンが人を狩る為の部屋なのか？

意識が、、、やだ、やだよ、、、こんな処で死にたくない！

気力を振り絞りこん棒を受け流すが力は抜けていく、、、「助けて」

「あいよっ」

そんな軽い声が聞こえた瞬間、目の前のゴブリン達の上半身が横に
ずれた

私は意識を失った。

俺はゴブリンの胴体に向け一閃する、少女の目の前の10体を纏め
て切り裂いた

返す刃を岩陰の気配に向けて投げつける、岩を貫き気配を切り裂い
た。

少女の剣を奪い魔力を張る、未だ呆然としているゴブリンを2体切
り裂く

「ぐっ！」

左側面からこん棒が打ち降ろされた魔力の壁が致命打を軽い衝撃に
変える。

まだ魔力は前身にしか張れないから背中を見せたらアウトだ。

ゴブリン残り8体

3方向からこん棒が迫る

俺の後ろには女の子がいる、避けるわけにはいかない

剣で受ければ、この人数相手では隙となる、上段に構え

こん棒が当たる瞬間身体を捻り受け流し、その勢いそのまま
袈裟がけに左のゴブリンを1体切り裂く

振り下ろした状態を狙い、左から別の2匹が襲ってくる

俺は剣を足元に手放し、両手に魔力の膜（軟）を張り左からくるこ
ん棒2つを

二つの手で右のゴブリン2体の頭に受け流す、

こん棒は綺麗な曲線を描き2つの汚い火花を咲かせた

すかさず足元の剣を蹴り上げ右手で掴み

体制を崩した2匹を切り捨てながら目は他の3匹を追う

残り3匹は、逃げ腰になってるな

俺は右手の剣を床に突き立て胸を張る、逃げたければ逃げろと

ゴブリンはこちらをちらちら窺い

俺が動かないのを確認すると背中を向けて逃げ出した。

俺はこの瞬間に剣を先頭の一匹に投げながらこん棒を拾い追いかける
目の前で先頭のゴブリンの頭に剣が突き刺さる

後ろの2匹は驚き足を止めこちらを振り向く

襲いかかる俺に気付いたが、後ろを向いて逃げようとする

用意された逃げ道に、戦う選択肢は2匹の中から消えていた。

ゴブリン殲滅完了

俺は女の子に駆け寄り傷の手当てをする

薬草（森で採取、買う金も無いしね）を擦り込み包帯を巻く
顔色は悪くない、足元のとらばさみに睡眠性の毒が塗られているな
森で取れる物と同じだ、暫くすれば目を覚ますだろう

金髪の可愛いより綺麗と表現した方が良い美少女だ、？つうかこの女の子

試験の時の女教官じゃね？改めて見ると胸が、でかいな、
どきどきしてきた！、これが恋？（欲情の目）

ゴブリンの死体は時間と共に消え去り、後には金が残された。

1匹2ゴールドか、全部で20ゴールド

岩陰の奴は10ゴールド！ひゃっほー！

今更だけど良く勝てたねー

正直1対1ならまず負ける気はしなすが多数相手なら話は別

元々一人で生き延びてきた俺は（ルウに出会って一変したが）

自分が簡単に死ぬ存在である事を理解してるし

多数相手には如何に逃げるかが重要で戦う事は無謀でしかない事を
知っている

俺は生き延びる事に関してはエキスパートなのだ！

「あつ宝箱だ（喜）」

ザクッ

とらばさみ発動

意識が薄れる、嫌だ、こんな最後かつこ悪いよ、薬草を、
もう持ってないし、

「助けて」

俺は意識を失った

2人の他には誰もいないホール。
まるでそこだけ時が止まった様にまるで変化がない。

静かに進む時の中、部屋の空気が少しずつ変わっていく
動物の死体と硫黄を混ぜたような吐き気を催す匂いが部屋を満たす

俺は瞬間目を覚ます、長いサバイバル生活で毒草等も食べてきた俺は
毒に対する耐性が高い。

加えて部屋に満ちる悪臭が俺の生存本能を大きく刺激し
急激な覚醒を促した。

入口から顔を出したのは2メートルを超す巨人、
童顔に長い手、腹がぷっくり膨れている

右手には巨大な鉈が握られている
鉈に染み付いた血が歴戦を語る

トルルだな、外見から判断する
庇いながら戦うのは無理、魔力は無い
見捨てて逃げる選択肢は存在しない。

「倒すしかないな」
状況を素早く確認し、ナイフを左手、剣を右手に走り出す。

その長い手から繰り出される一撃は必殺
魔力の無い俺に出来るのは回避のみ

懐に入るのは容易そうだが、奴の空いた左手がやばい
掴まれたらそこで終了の予感の間違いないだろう。

こちらの攻撃がどの程度通じるか把握する必要がある

振り回される鉈を紙一重で避けながら
トルルの腕を切りつける、人肌と大差はないか
様子を窺うが疲弊している様子は微塵もない
長期戦はこちらが不利になるな
俺はトルルの真正面で足を纏れさせ隙を見せる
トルルはその隙を逃さず俺の頭に鉈を振り下ろす
それこそ俺が望んだ状況と気付かず。

予測出来る行動なら一手先が取れる
鉈を避けると同時に跳び上がり鉈の上に乗る
左手のナイフをトルルの喉に向かい投げ付ける
狙い違わず突き刺さるナイフに瞬間トルルが硬直する
右手の剣を両手で持ち直しながら腕を駆け上がると
首を目掛けて剣を一閃させた。
予想以上に抵抗が無く、バランスを崩した俺は
慌てて距離を取る、油断は出来ない。

トルルが消えたのを確認し、力を抜いた。
後に残った30ゴールドを回収し
女教官の様子を窺う、起きる様子は無いな

一度迷宮から出る必要があるが、、なにかが可笑しい
ランク1にしては敵が強い気がする。
俺が来た筈の入口は何も無く、行き止まり
別の出口を探す必要がある。

「試練つつより死ねって感じの迷宮だな」

試練の洞窟は冒険者のカードに書き込まれた
情報を自動で読み取り、その内容に応じた階層に移動される
出る方法は3つ、

入口のワープゲート

出口のワープゲート

依頼を達成すると出現するワープゲート、、、まずここが可笑しい
俺の依頼ゴブリン5匹だし！

21匹倒したんだけど！

ワープゲートのワの字も見当たらないんだけど！

腹を立てても問題は解決しない

状況を整理する

明らかにランク違いの魔物の数、種類

依頼達成してもゲートが出現しない

場違いな女教官

、、、この階層は恐らく女教官の依頼だと推測出来るな。

彼女の冒険者カードを確認する必要がある。

どうやら胸元に仕舞っているみたいだ

、、、緊急事態だしよがないよね？

ドキドキしながら胸の中に手を伸ばす、、、

「・・・」

「・・・」

いきなり目が合った

視線が下がる、状況確認

死を運ぶ拳に俺の生存本能は反応しなかった

俺は再び意識を失った

ズリズリズリ

ぼんやりと意識が戻ってくる

ズリズリズリ

何か、、、尻が、、、熱い、、、

ズリズリズリ

、、っ！つうか痛え！

ズリズリズリ

俺は慌てて状況を確認する

仰向けで襟を掴まれ引き摺られている

身体を捻り、うつ伏せの状態に、更に両足で踏ん張り

俺を引き摺る腕をナイフの先端で軽く突く

鋭い痛みに手が離され、自由になった俺は距離を取る

「なんのつもりだ？」女教官が俺を睨む

「それは俺の台詞だ！」言いながら俺は尻を相手に見せる
服が摩擦で破れ尻は腫れあがり土と血で見るも無残だ。

「汚い尻を見せるな」女教官は顔を顰める

「汚くしたのはお前だ！」俺はいきり立つ

それを女教官は鼻で笑う

「不埒な男に十分な対応だろう？むしろ連れて来てやった事を感謝
して欲しいな」

「かっちゃん！キレたぜ、、、

「・・・許さねえ！」

「ふん・・・どうする気だ？」女教官は警戒し身構える

俺はナイフを収め右手を前に突き出す

「フレアボム！」もちろん魔法は発動しない

「！」啞然とする女教官

「・・・フレアボム！」

「・・・」

「あれ？フレアボムうー！」

「・・・殺す！」顔が俺の尻より赤くなつた女教官が俺に殴りかかるそれをひよひよいひよい避けて追撃

「無謀な攻撃は仲間を危険に追いやる事を忘れるな」

「！！・・・！！」言葉にならない悲鳴を上げ俺に飛びかかる大きく右に避け、止めにお尻ペンペンしようとしたが

俺の方がダメージを受けそうな状態なのでそれは止めておいた。

女教官は大きく肩を落とし力を抜いた。

「もういい」まだ赤い顔をこちらに向け姿勢を正す。

「助けてくれて、ありがとう」深くお辞儀をする。

「へ？」素直な言葉に頭が付いて来ない俺

「私の名前はフレア、失態を見せた魔法と同じ名だ」

むしろ良い教訓になるだろうとフレアは微笑み言葉を続ける

「君は新入生だね？名前は・・・」

「ケイジです」言葉を改める俺

自己紹介をし、把握している状況を説明した。

「そうだったのか・・・酷く不埒な視線に感じたのだがな」

「不純な動機じゃありません！」

ちらっ（胸を見る）

「冒険者カードの確認に」

ちらっ（胸）

「必要だったのです！」

ちらっ（・・・胸）

「・・・謝る必要はないみたいね」

呆れた顔をしながら砕けた口調で話し始めるフレア

「？」何故謝る必要が無いのだろう？（無自覚）

「話し方が変わりましたね」砕けた口調に疑問を呈する

「女性の教官は舐められやすいからね、強気でいかないと」

「？」尚更話し方を変えては拙いのではないのか？

不思議そうな顔に気付いたのかフレアは疑問に答える

「お互い見られたくない所を見られたんだ、隠す事もないでしょ？」

俺が自分の力量を隠したがってるのがばれたか、

話の流れから考えると問題は、、、ないな、黙ってくれるだろう

「教官には敵いませんね」手を差し出す

「フレアで良いわ、ケイジも普通に話して欲しい」

但し皆の前では教官に対しての態度を取るように

悪戯めいた笑顔で唇に指を当てる。

くっ、、少ときめいてしまった。（不覚）

「さあ、まずは迷宮から出ましようか」

????

「「それ」「は興奮していた。

獲物からは極上の匂いがする

早く食べたい 早く食べたい 早く食べたい

獲物が死ねば、すぐ食べる事が出来る

早く死ね 早く死ね 早く死ね

「「それ」「は嘗て叡智を極めた存在

「「それ」「は誰よりも力のあつた存在

「「それ」「は世界を滅ぼしかけた存在

「「それ」「はすでに滅ぼされた筈の存在

「「それ」「は迷宮に呪いを掛けていた。

死んだ生き物の全ては「「それ」「に吸収されるように。

それは正に全て、「「存在」「の因果律まで至る

だから誰も気づかない、誰も「死んでいない」から
その「存在」自体吸収されているのだから。

その呪いは、塵と化した「それ」を復活させた。

歪に 歪に 歪に 歪に

嘗ての知恵は無く、知識はあるが、その知識を理解出来ない

力はあるが使い方が解らない

ただ食べたいと思い、その思考に応じて迷宮は変化する

「それ」は迷宮そのものと化していた。

「出口がない？」

「ええ」

声を上げる俺と、逆に低い声で返すフレア

俺の予想と異なり、フレアは依頼自体もってなかった。

迷宮の構造も来た時と変わっている

ワープゲートは特殊な魔力構造で編まれてるので

慣れれば容易に場所を把握出来る。

しかし、その場所には何も無いと、、、って

「え？えー！？」

「ええ」

声を上げる俺と、逆に低い声で返すフレア

「他に出る方法はないのか？」

「ええ」

「うーん」

「ええ」

「・・・」

「ええ」

「結婚しよう」

「ええ」

フレアは混乱している？！

自分で何とかするしかないか、、、

食料は干肉が一切れと水が水筒に8割

短期のつもりだったので殆ど持ち合わせていない。

つまり今、今が俺のピーク、この状況を覆すのは今が最適だ
時間を掛ける程、事態の打開は難しくなる。

ダンジョンで起きた事を整理する

魔力を吸収したトラバサミ

魔物を倒した後、魔物は粒子となり迷宮に溶けていった。

魔力は感じるが、存在しないゲート

変化する迷宮、まさか!?

俺は結論を得た

「全ての謎は解けた」

俺はニヒルな笑みを浮かべた。

「何か分かったの？」

興味がフレアを現実に戻す。

「ああこれはな・・・」

フレアを見上げ、そこで一度言葉を貯める

「夢だ！」

「は？」

「まあ聞いてくれ、いくつか理由があるんだ、先程カードを見せたとおり

俺が受けたランクは1、初級で、ゴブリン五匹討伐だ」

「ええ」

「明らかに飛ばされた階層は異常だ、入口も無ければ出口もない、畏はあるし

敵の数も強さもランク1とはとても思えない。」

「そうねランク1の階層では無いわ、それはケイジが誤って私の階層に飛ばされた

と考えれば辻褄が合うんじゃないかしら、ケイジもそう言ってたわよね？」

「ああ、だが其処が可笑的い、この迷宮で人が死んだなどと聞いた事がない、

こんな事故が起こるなら、説明があつて然るべきだが、何も聞いてない。」

「・・・確かにこの迷宮で人が死んだ事はない筈ね、魔力を吸い取る罠も知らないわ」

「何より俺は強いが、一人でゴブリン21匹倒せるほどでは無い!、つまり夢だ!」

「そうかしら?・・・カ、ヨカツ、ケ、」

「?何か言つたか?」

「つ何でもないわ!えーと・・・幻影の可能性はないかしら?」

「それは無い、敵は強いが倒せたし、違和感が無い」

「違和感?」

「ああ、幻影は戦いの最中に必ず矛盾が生じるが、俺はそんな感じなかった、

それに出口を隠しても其処にある筈なのに使用できないのも可笑しい。」

「確かにそうね・・・ケイジは幻影魔法が使えるの?」

「いや・・・魔法は殆ど使えない、知り合いに一人使い手がいたんだ・

・
そういう事でこれは夢と、しかもより現実に近い夢だな、餓えれば死ぬし

殺されたら、やはり死ぬだろう。」

「夢に違和感はないの？」

「違和感を違和感と感じないのが夢だ、フレアは夢の自分の世界に違和感を感じるか？」

「成程ね・・・何とかなりそう？」

「夢は覚めるもんだ」

出口が無いなら作ってやるよ。

この迷宮は魔力を吸収してる、魔力の流れを操作しているのだろう
そして俺は元は魔力の非常に低い存在で、故に誰よりも魔力の操作
に長けている。

俺は迷宮の魔力を夢を作る原型と仮定した。

なら、迷宮の魔力を吸い出せば、、、夢から覚める筈だ。

現実の俺なら不可能だとしても、今の俺なら出来る！

俺は右手を地面に付け、迷宮に流れる魔力を感じる、、、っこれだ
な、、、

魔力の質を同調させ、流れを自分に向ける
なんか違う力も混じってる気がするが、、、気のせいだろ。

ケイジの予想は外れていた

力は別に強くなっていない
元々森で一人生き延びてきたケイジは、世界の中での自分の実力を
把握していない。

倒せないと判断したのは未知の生物に対する防衛本能が働いただけ
である。

生き延びる術に長けたケイジは決して、自分を過大評価しない。

これは夢ではない

だ目的を外れた予想から始めた行動は、、、あまりに的を得ていた。

思い込みから得たイメージは、本来出来なかった魔力の吸収を可能とする。

ケイジが摂取したドラゴンの血と、左手に融合したドラゴンの鱗が莫大な魔力の吸収により化学反応を起こす。

本来耐え切れない量の魔力をケイジの体は吸収する

弾けるはずの内蔵器官は血の力で弾けない

裂けるはずの皮膚は鱗の力で裂けない

一欠片の血と一枚の鱗は魔力の吸収によりその力を増幅させる作り変わり続けるケイジの肉体は既にドラゴンを超越していた吸収は止まらない、、、。

???

「「それ」」は混乱していた。

「「それ」」は搾取する側であつた。
故に搾取された事はなく、対応も出来ない。

知恵がないので対応策も湧かない。

為す術もなく吸われていく魔力
魔力と融合している力も抜けていく。

強大な力を持つ「「それ」」
しかし食欲だけで構成された意識は吸収以外に出来る事は無い
否、出来る事が分からない。

誰にも滅ぼす事の出来なかつた「「それ」」は一人の少年により
誰にも気付かれず、呪いと共にその生涯を閉じた。

「ふう」

吸収を終えた俺の前に、ワープゲートが出現していた。

「ざつとこんなもんだ」

どうだ？とばかりにフレアを見る。

「ケイジ・・・貴方本当に人間？」

呆然とした顔のフレア

「夢だからな！」

俺は断言する、今なら神様だって倒せそうだ。

「・・・ふふっそうね・・・んっ？」

フレアが何かに気づいたように視線を上上げる

俺も釣られて上を見上げ、「っ！」

瞬間とても柔らかい何か俺の唇に触れていた。

「ふわっ」

呆然としてただ声が漏れた。

「ありがとう・・・かつこよかったよ！」

夢だしねと言い残しフレアはワープゲートに消えていった。

俺は唇に残る余韻に暫く惚けていた、、夢、、だよな？

イジメ

カァー、カァー

「はっ」

鳥の声に正気に帰る俺、辺りは薄暗く、学園を黄金色に照らしていた。

カードにはゴブリン討伐達成とあるが、ゴールドは手元がない。現実の影響の出る夢、、、分かん！俺は考えるのを止めた。

「ん？」

精霊が集まっているな、、校舎裏か、、行ってみるか。近づくにつれ喧騒が耳に入ってくる

「オラァ！」

蹴り上げる

「っ！」

「ハハハッもつと大声で鳴けよ豚！」

蹴り上げる

「っ！、、止めて、、トサレ」

「止めないで下さいだろっ！」

蹴り上げる

「っ!」

「止めないで下さいだろっ?」

蹴り上げる

「止、止めて下さい」

「やめないで下さいだろっ?」

蹴り上げる

「・・・止めないで・・・下さい」

「了解!ハハハツ!」

背の高い男が、気弱そうな男に足を振り上げるのが、目に入った。周りに2名、ニヤニヤとその様子を楽しんでいる。

「待てっ!」

俺は2人の間にするりと入り込み足を受け止める。

「あ?何だお前」

背の高い男、略してのっぽは邪魔をした俺を睨んでくる。

「俺の事などどうでもいい、お前はこの学園に何の為に来た、その長い足で」

そいつを蹴り上げるためか、違うだろうか？」

「……」

思う所があるのか黙り込むのっぽ、俺は話を続ける

「お前の長い足は、ジュース買いに行ったり雑用に向いていると俺は思う！」

「ああ？」

「喉乾いたから早速ジュース買ってきてくんない？」

「……ぶつ殺す！」

殺気立つ面々に俺は余裕を崩さない、何故なら

「教官！助けて下さい！」

すぐ其処に教官がいるのを知っていたからね！しかし反応がない？俺は名指しで教官を改めて呼ぶ

「クリスマス教官助けて下さい！」

名指しされた教官は嫌そうな顔をしながらこっちに来た。

「……覚えてる！」

逃げ出すのっぽ以下3名

教官はこちらに来ると

「また君か」

気弱そうな男を見下ろし苦々しげに吐き捨てた。

「は？この子虐められてた被害者ですよね？」

俺は率直な疑問を尋ねる。

「この子にも言っているが、虐められる方にも原因がある、つまり努力が

足りない、本人が何とかするべきだ。」

教官はしたり顔で答える、視線の先の男の子は手を強く握り締め、俯いている

「それは違うな！」

俺は断言する、顔を強ばらせる教官と、驚きに顔を見上げる男の子、教えてやる

いじめが始まる原因、その全てを！

俺は音もなく教官に近づき、神速を持って顔を殴る、反応すら出来ない教官

腹を殴る、音も無く崩れ落ちる教官を蹴り上げ元の姿勢に戻す。

「っ・・・何故・・・こんな」

「はあ？これはいじめだぞ、原因くらい分かるだろ？」

「そ・・・そうか・・・私が悪かった、もう許してくれ」

「許してくださいだろっ？」

「許・・・許して下さい！」

「許すわけねえだろ？」

俺は腹を蹴り上げる、吹っ飛ばされる教官
わざと俺は距離を空けてやる。

教官職は冒険者を育成する為、全員が一定以上の強さを持っている。
まだ余力があるはずだ。

予想にたがわず教官は腰から剣を抜き、こちらに走りながら、魔法
を唱える

「フレイルムロンド！」

炎が俺の周りを囲み、一気に閉じる、対する俺は左手を突き出し
全ての炎を魔力に変換吸収した。

驚愕の顔を浮かべ、それでも止まらず剣を突き出す教官
目前に迫る剣を俺は無造作に右手で掴みへし折った。

「どおした？努力で何とかなるんだろ？」

「貴様・・・退学にしてやる！」

「無理だな・・・お前は今塵も残さず死ぬんだからな」

俺の右手に全てを滅する魔力が集う、教官は自分が間違いなく死ぬ
と理解した。

「止めてください！」

「分かった」

男の子の声に俺は手を止めた。

教官に向き問いかける

「俺の手を止めたのはこいつだ、あんたに俺が止められたのか？なあ？教官、」

俺が何故あんたを虐めたか、理解できたか？」

「……」

「いじめの原因より、いじめを止める事が最初だろうが！」

首を項垂れる教官、よし！心は折れたかな？4歳で捨てられた俺にいじめを語るなど100年早いね！

俺は男の子に向き直る

「お前、名前は？」

「ア・・アルトです。」

「アルトは精霊に好かれてる」

「え？」

「精霊が助けを呼ぶのが聞こえたから俺は来た、精霊使いになれるな。」

精霊使いは世界に数人しかおらず、その力は途方もない、アルトは驚く

「そんなの見えた事ないです……。」

「アルトは冒険者志望か？」

「ええ・・・」

「じゃあ俺が強くなるまで守ってやる、但し冒険者になったら借りを返せ、どうだ？」

「・・・よろしくお願いします！・・・あのっ・・・お名前は？」

「俺の名はケイジだ、よろしくな！」

差し出した右手をアルトは強く握り返してきた、最高の笑顔で。

学園長

ケイジは自らの力の大きさが異質な程変化した事に気付いていない。その強大な力はケイジの慎重だった性格を大雑把にしていた。

クリスは優秀であった。

非を認め、折れた心を奮わすぐらいに

この力は国に報告し、すぐに取り込む必要がある！

クリスは満身創痍の体を引きずり、学園長室に入る

「失礼します。」

「クリス君か・・・実は「まあ待ちたまえ」

早々に本題に入ろうとするクリスを遮り、右手を近づける
クリスの体を魔力が廻り、腫れ上がった顔から傷んだ内蔵
あらゆる傷が塞がっていく、数分立たず、クリスは健全な状態に
治っていた。

その力に戦く体を抑え、話を切り出す。

「ありがとうございます、実は新入生のケイジ＝フラウについて話があります。」

「・・・ふむ、力の事かね？」

「っ！お気づきでしたか・・・」

「心配ない、彼は既に同志だ、将来学園の力になって貰う、国とは話が付いている」

「！そうでしたか・・・出過ぎた真似をしました。」

一礼し、部屋を退室するクリス

自分以外誰も居なくなった部屋で独りごちる

「彼の力は国には勿体無い・・・私の下で力になって貰う」

髪が風に靡く、誰が気付こう、この髪がズラである事に！

しかし彼は明らかに私のズラに気付いた！

より完璧なズラを創るために、彼の力が必要だ！

すでに国に対し根回しも済んでいる、必ず手に入れる！

そう、ケイジが会った面接の髭面のおっさんが、学園長だったのだ。

ケイジは未だ迫る学園長の陰謀には気づかない。

依頼達成

俺は依頼室に来ていた。

「おばちゃん！依頼達成したよ。」

「！あんた無事だったんだね・・・良かった。」

「何かあったの？」

「今回、生徒に怪我人が多くてね、まだ帰ってきてきてない生徒もいるのさ」

あんたもその一人・・・が無事が確認できて良かった」

心から嬉しそうに話すおばちゃんに胸が熱くなる！

誰だおばちゃん（涙）なんて言ったのは（怒）

今回の迷宮はイレギュラーが多かったみたいだ

俺も今回はいきなり死にかけたし、噂とは真逆の危険な迷宮だな
暫く行くのは控えるか、、、

「あんたの依頼は5ポイントだね、達成おめでとう！」

俺が考えてる間に手続きを済ませてくれた、早いな、そして素敵だ

「洞窟以外でハンター系の仕事ある？」

「入口側に貼られた依頼書がそうさねっ」

「依頼書って複数取っても良いの？」

「大丈夫だよ、但し！未達成の場合、罰金になるよ。」

「・・・一枚にしとくかな・・・」

「だっはっは！、好きなだけ取っておいで、今回はあたしがケツ持つてあげるよ

但し！未達成の場合雑用を手伝って貰うよ。」

限界を身を持って知る事も経験と男前な発言をするおばちゃん、背中がデカイな。

まあ野外の達成は自信がある、多めに取っても達成出来るだろ、適当に同じ地区の依頼を纏めて剥がし、おばちゃんに渡す。

「はい、冒険者カード（仮）に書き込みました。」

業務の顔に戻り対応するおばちゃん

無理だと思ったら使用しなさいと、帰還石を手渡される。

俺の恩返しリストに二人目が刻まれた。

精霊使い

朝日の光が窓から差し込み俺の顔を照らす
眩しさに手で顔を庇い、目を覚ます、軽く手を伸ばし体をほぐす
厳しい生活習慣から早起きなのだ。

部屋から出ると、アルトの部屋に行く。

「おつす！起きてるか？」

「ふひゃあ！」

素っ頓狂な声を上げるアルト、なんだ？女じゃあるまいし
男の背中なんか見ても、ぐびりっ、っ！違うから！、俺は男
に興味ないから！

、、、どうもルウに続いてアルトと色気のある男と縁があるな。

「部屋に入る時、ノックするのは最低限のマナーですよ！」

「はい・・・ごめんなさい」

綺麗な顔を膨らまし、先日の気弱そうな姿は影を潜め、怒りと羞恥に
顔を真っ赤にしている、、、これは可愛いな。（男だが）
俺もぐびりとなった手前、強く出れず素直に謝った。

「今日はどうされたんですか？」

「ん、アルトに精霊契約を薦めようと思ってな」

「……只の励ましの言葉だと思っていました。契約の仕方をご存知なのですか？」

「ああ、契約に必要なのは二つ、精霊に好かれている事と、精霊と一つになる事だ」

「……後者は不可能に思えますが。」

「心配ない、精霊はより自分に近い存在、より白い精神の持ち主に惹かれる」

精霊に好かれる事と、一つになる事はほぼ同義だ」

俺は床に魔力で文様を描き、其処にアルトを立たせ、指先を地面に向け

魔力を打つ、打ち込まれた地点から魔力が円を描き、やがて円の中を不規則に走ると、アルトの体に飛び込んだ。

アルト

<こんにちは>

可愛らしい妖精が私の周りを踊ってる、楽しくなって手を取り一緒に踊り挨拶をする

<こんにちは>

その瞬間、私は風になった。

アルトの手の甲が薄く光る、契約は上手くいったようだ、早いな、天才か？

「……っ」

「どんな感じだ？」

「体が軽いです……遠くが……まるで近くのように見えます！」

「精霊と契約すると、一部の力を取り込む事になるからな契約する程強くなる、それが精霊使いだ」

「……ケイジさんは何者ですか？」

精霊の契約の話など聞いたこともないし、精霊に好かれていると指摘してくれた教官もいない、何より教官を圧倒する力、全て規格外だ

「……子供の頃、俺に沢山の本を持ってきてくれた友人がいてね、そこで得た

知識だと思っただが、よく覚えてないんだよね」

ちなみに精霊は昨日見えるようになったと、ケイジは悪戯っぽく笑うその笑みにアルトの心臓の鼓動が跳ね上がる、えっ？

「じゃあ手袋買いに行こうか！」

「えっ？」

「契約の印、手の甲に刻まれたからな、慣れたら隠すのは容易だがそれまでは手袋を使うといい、まだ寒い時期だし違和感もない、俺の奢り！」

契約祝いだと嬉しそうに言うケイジ

ずきゅーん

胸を貫く音がしたが、私の気のせいだろう

「ゴメン金貸して」

「・・・最低です」

やはり気のせいでしたとアルトは呟いた。

野外ハント

学園の西の外れ、パラッパ平原に俺達は来ていた。

優しく頬を撫でる風に目を細める、目前に広がる広大な緑！
その開放感に心が解き放たれるようだ、、、

「・・・何をしてるんですか」

服を脱ぎだした俺をジト目で睨むアルト

「え？身も心も解き放とうかと・・・アルトもどうだ？」

無言で俺にビンタを右頬に食らわしてきた、俺はにやりと笑って
左頬を出す、大人の余裕だね！、、、痛い痛い痛い痛い痛い
俺の顔はくるみを頬張ったりスのように（泣）、意外と容赦ない
な（冷や汗）

今回の目的は、依頼の複数達成、ソロ登録していたが、アルトの精
霊魔法の練習と、

二人の連携を試してみようと、パーティー登録に変更した。

「！いました、シルバーウルフです。」

一早く獲物を見付けるアルト、俺は目を凝らし、ようやく、見え
ないな、、

アルトの高性能ぶりに驚きつつ、身構える。

最初の依頼にシルバーウルフを選んだ理由は、俺がウルフ系の敵に
慣れている事と、素早い敵にアルトがどの程度対応出来るか見ると

めだ。

「群れの数は13匹ですね、私達に気付いたようです。」

アルトは淡々と準備を進める、手馴れた手付きだ、アルトの武器は包丁

倒した後に、そのまま料理が出来るので便利らしい。

アルトは学園生活2年目らしい、学問の単位は取得済みだが依頼達成のポイントが足りないようだ、ソロなら迷宮が良いのだがどうしても入る気になれなかったらしい、、わからんでもないな。

野外は群れの敵が殆どで、ソロで出来る依頼でも

別の群れに囲まれる可能性が高い、そこでパーティーを組んだのがあの3人組というわけか、、思うように達成できない依頼のイライラを、アルトにぶつけ、やがてエスカレートか、、くだらない。

アルトは最初は優しかったんですよ？と寂しげに笑った。

近づいてきたシルバーウルフが間合いに入った瞬間

アルトの精霊魔法が炸裂する

「風よ、敵を切り裂け、シルフ！」

ひゅーーーーーーーーー

そよ風がシルバーウルフを優しく撫でる、シルバーウルフは気持ち

良さそうだ！

「・・・ッブ」

痛い痛い痛い、、クソッ、俺の頬っぺは餅じゃないぞ

襲いかかるシルバーウルフの牙を引きつけ、ナイフの柄で頭を叩き割る

背後から飛びかかる2匹目を足で踏みつけ

更の上から牙を剥く3匹目に目掛けて突き上げる

驚愕の表情を浮かべ振り向く2匹目の眉間にナイフを突き立てる
アルトの様子は、、っ凄いな。

華麗なステップでシルバーウルフの攻撃を鮮やかに躲す

その姿はまるでダンスを踊っているようだ。

躲しざまに煌めく包丁は喉元に円月を描き、次々と死体が出る

俺も負けてられないな、、

夜

「ご飯できましたよ」

「ワイ」

アルトの作った飯はヤバイ

「うま、うま」

「落ち着いて食べないと火傷しますよ」

ケイジさん、もう、この人は可愛すぎる、
物知りで、強くて、でもどこか抜けてて子供っぽい
双子のあの子を思い出す、、、

「・・・私、弟がいるんですよ、双子の」

気付いたら私は話し出していた。

ミクシー村

私の住む村は小さいけど、のどかな良い村だった。

料亭の子供だった私は、閉店後いつものように店の外の掃除をして
いた。

すると物陰にお年寄りが座り込んでいました。

「なにか・・・食べる物を・・・」

私は急いで店から食べ物を持ってきて差し出しました。

おじいさんは大変喜び、言いました。

「お礼にお前を私の嫁にしてやるっ」

私は丁重に断りましたが、おじいさんは聞いてくれません。

腹を立てた弟が、私に変装して言いました。

「お前と結婚するくらいなら犬と結婚したほうがまだましだ。」

「ならお前を犬にしてやる！・・・犬と結婚するがいい！」

おじいさんは呪術師だったのです。

その呪いは強力で誰にも解く事は出来ませんでした。

ようやく見付けた方法は2つ

魔物の上位種、ゴールドウェアウルフの肝を食べる。

呪術師より魔力の強い人間が呪いを肩代わりする。

依頼をだそうにもゴールドウェアウルフは伝説級の魔物です。

店のお金をつぎ込んでも端にも届きません。

私に出来るのは、ゴールドウェアウルフを倒すしかない。

幸い私は学園に入る事が決まっていたので、冒険者を目指す事にしました。

「ゴルドウエアルフに呪いか・・・」

ミクシー村

俺はミクシー村に来ていた

小さな村だな、聞いていた通りのどかな雰囲気、かと思っただが、なんか視線が痛いな、まあ気にせず行こう。

村の中を歩いてると料亭の看板が目についた、ここだな

「まだ営業時間じゃないぞ！」

「飯を食べに来たんじゃない、呪いの事でね」

「！貴様あの呪術師の仲間か？家にある金は全部払った、約束通り呪いを解け！」

「違う、俺はこの家の長男から依頼された者だ。」

「・・・家に長男なんていない！」

「？アルトっているだろう？」

「っ！・・・ああ・・・すまない・・・しかし何の依頼を？」

「それは後程、先に弟を見せてくれるか？」

「ああ・・・こっちだ」

俺は料亭の2階の右奥の部屋に案内された、部屋の中に犬が座り込んでいる

「殆ど・・・動く事もないんだ・・・ご飯を食べる量も・・・段々・・・つくそつ！」

憤るアルトの親父さん、、ああ許せないよな、、

「親父さん・・・少し離れて貰えるか・・・そう入口の辺りまで、そこで動かないで」

俺は床に魔力で文様を描く、其処に犬を置き、自らに呪いを移す作業に入る

手の平を通し、魔力の流れを慎重に犬から自分に変える、、つ移つた！

人を呪う人間は同時に呪われている、、魔力の流れは呪術師に繋がっている

俺は自分の魔力を上乗せし、魔力の逆流を行なった、、通った！俺の目によぼよぼの老犬に変化した爺さんが見えた、、返る呪いは倍となる

奴の呪いは死ぬまで解けないだろう、、自らの行いを死ぬまで悔やみ続ける。

目が覚めると、人の姿に戻った弟を親父さんが泣きながら抱きしめていた。

「ははっ本当にアルトそっくりだ」

「ガンガン食ってくれ！」

「うま、うま」

アルトの腕は親父さん譲りだな！

「……本当に有難う……この恩は一生忘れねえ」

「友人の親父さんだ、気にしないでくれ、それと弟が治った手紙を学園に送ってくれ、必ず俺の事は内緒にして欲しい。」

「何故だ？アルトから依頼を受けたんだろう？」

「あれは信用を得るための嘘だ、一緒に学園で暮らす仲だ、気を遣わしたくない。」

「もうそこまで……ケイジ！お前なら任せられる、俺の事は義父さんと呼んでくれ。」

え？俺を家族として見てくれるのか、アルトの親父さんだけあって暖かいな

「……お父さん」

「なんだ息子よ」

熱い抱擁を交わす2人、お互いの微妙な食い違いには気づかない。

同調

???

殺したい 殺したい 殺したい

俺のストレスは貯まる一方だ、俺は貴族だ、平民を殺しても罪に問われない

抵抗できない弱者を殺すのは頭が白くなる程楽しい爵位が上がれば同じ貴族を殺しても罪に問われない、俺は更なる出世の為此の男に付いている

無礼者を手打ちにしようとしても、止めてくる臆病者だ、、

しかし出世の為此はこの臆病者に合わせるしかない、、

今は我慢だ、、ああ、殺したい、悲鳴を聞きたい、、。

今は我慢だ、同じ貴族を殺し、悦楽に浸るために！

はあ、誰か殺したい、、死ね 死ね 死ね 死ね 死ね！ 死ね
！！

???

「それ」は怨嗟の最も大きい場所に出現した。

「それ」は最も大きな戦場に出現した。

「それ」は敵も味方も無く、その場にいる全てに死を与え、静かに眠る。

「それ」は今、戦争が起きてないこの世界に目覚める筈のない存在

しかし目覚める筈の無い「それ」は覚醒を始める

偶然、一人の貴族の居る場所の下に「それ」は眠り

偶然、貴族の意識と「それ」の意識は同調した

それはありえないほどの奇跡、、、、ありえないほど最悪の奇跡。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2113ba/>

ドラゴンから始まる物語

2012年1月14日12時53分発行